

二〇一七年度 第一回

国語 (50分)

△注意▽

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから27ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

最近になって、「多様性」が大切だと言われるようになった。

しかし、そもそも、多様性のメリットはどこにあるのだろうか。それを私たちは本当にわかっているのだろうか。すべてのことは経験を通じて発見されるもので、多様性を体験していない日本人は多様性をよくわかっていないのではないか。

① 多様性には三つの大きなポイントがある。それぞれ独立しているわけではなく、非常に② ミツセツにつながっている。

ひとつは「アイデアのオプションが拡大する」という点だ。さまざまなタイプの人が集まると、さまざまなアイデアを持ち寄ることができる。そのため、集団の幅が広がるという考え方である。

料理を考えてみよう。シェフとしてアメリカ人、イギリス人、日本人、中国人、タイ人が集まったとする。A、同じ食材でもまったく料理の仕方が変わる。それぞれのシェフがつくった料理のなかでどれが最もおいしいかということではなく、料理のバラエティーを楽しむことができるというわけだ。

B、五人のシェフが一堂に③ ことでフュージョン（融合）が生まれる。日本の寿司屋がロサンゼルスに進出した結果、カリフォルニアロールが生まれたように、たんにオプションが拡大しただけではなく「1+1=3」になるような組み合わせによってシナジー（相乗作用）が生まれる。私たちがイメージする多様性は、こうしたポイントである。

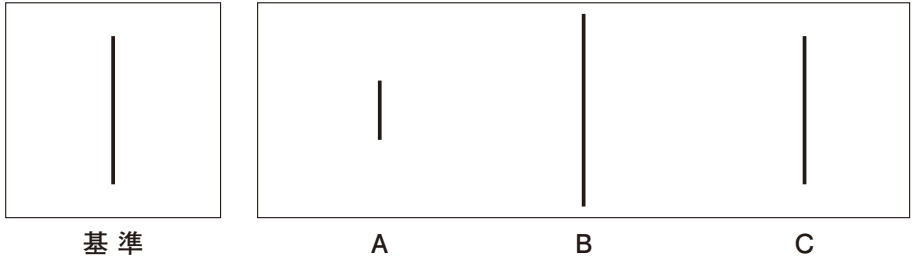
C、それ以外にも大きな効用がある。それは「調和を乱す」ことだ。このことを理解できるかどうか、多様性を考えるうえでかなり重要になる。

一九五〇年代に開発された「アッシュの同調実験」がある（次ページの【図】を参照）。

ポーランドからアメリカに亡命した心理学者のソロモン・アッシュは、一枚のカードを提示し、絶対に間違えようのない質問をする。

【図】 アッシュの同調実験

Q: 左と右で同じ長さのものを当ててください。



「この基準の絵と同じ長さはどれですか？」

この質問に対して三枚のカードを用意し、被験者に答えさせる。ひとりでやると、正解率がほぼ一〇〇%になる質問だ。しかし、アッシュは「サクラ」「ここでは、実験者の意向に従って行動する人。おとり役」を用意する。

D 。そのとき、被験者はどの程度の確率で回答を引きずられるか――。

何度も実験を重ねて集計したところ、アメリカ人の学生のじつに七五%が間違った答えを選んだという。単純な知的作業のはずなのに、集団に入った瞬間にその人は単純な知的作業のほかに、無意識のうちに集団に同調しようとすることを加えた。

この同調圧力の威力はすさまじく、集団の全員が同じことを言っていたら、おかしいと思ってもなかなか口に出して言うことができない。自分の頭のなかでは認めたくないと思っても「こんなことを言ったら笑われたらどうしよう」「仲間外れになったらどうしよう」という潜在意識が働く。

もともと人間は、個体としては弱い存在だった。その弱さを補うため、^③ 徒党を こと
 によって生き残ってきた。群れることを好み、群れから外れることをきわめて恐れるのが人間である。そうしたDNAが刷り込まれているので、このような単純なテストでも同調圧力が如実に表われてくる。アメリカ人の学生の七五%と言ったが、インド人や日本人はさらに同調圧力が高いという。

この実験をほぼゼロに近い状態にまで戻す方法がある。

それは、サクラのなかのたったひとりが、他のサクラと違う答えを口にすればいい。他のサクラがAと言ったときに、BかCと言わせる。Cである必要はない。Bでもいい。その途端、いっぺんに空気が変わって同調圧力は霧消する。被験者は、ようやく自分が正

しいと思ったことを口にできるようになる。

組織や群れには、無意識のうちに同調圧力が組み込まれている。クリエイティブなことを考えようとするとき、あるいは新しい状況に対応しようとするとき、むしろ調和を乱すような行動をとる人間が多数いたほうが好ましい。

おかしなこと、バカなことを言う人が会議の場にいると、議論が活性化する。賢い人ばかりを揃えたからといって、必ずしも議論がうまくいくわけではない。賢い人が仕切ってしまったらみんながそれに同調すると、今度は違う意見が出てこない。

むしろ、**①** マト外れなことを言ったり、周りと違うことを言ったりする人がいることによって、周りの人たちの同調圧力のタガが外れるという結果が出た。そういう意味では、まずは「違う人」が存在するというだけで価値がある。

これと裏腹なのが「常識を破る」というポイントである。

私たちのアイデア、ルール、世界観は、私たちを取り巻いている環境によって形づくられているので、異なる環境から来た人たちは異なるアイデア、ルール、世界観があると考えるべきである。それが衝突したときに初めて、自分たちが持っていた常識にバイアス（偏見）がかかっていることを理解できる。

正しいかどうか。その状況に合っているかどうか。それはともかく、そのバイアスは無意識化されている。**④** それを意識化するという意味では、多様性を担保することによって異なる常識とぶつかり合うことが大切だ。

人間の行動のほぼ八割は無意識のうちに決まっているという。ユーチューブでもご覧になれるので確認していただきたいが、「インビジブルゴリラ」が反響を呼んだ。これはひとつのことに集中していると、別のことに目が向かないという実験だ。人間は集中すると他のことを意識化できないのは、脳の機能が限られているからにほかならない。いちいち考えながら行動を決定しては、動作が遅くなってしまふ。

人間の脳の重さは、全体重の三％程度しかない。しかし、エネルギー消費量でいえば二〇％を超えるという。これは全身の筋肉と同じぐらいのエネルギー消費量で、それほどエネルギーを使うのであればあまり使いたくないのが自然だ。

使うとしても賢く使いたないので、新しいことが入ってくるとそれをパターン化しようとする。最終的には、それを習慣化するところまでもつていく。そうするとエネルギーはほとんど使わず、条件反射だけで動くことができる。

ノーベル経済学賞を受賞したアメリカの心理学者ダニエル・カーネマンが『ファスト&スロー』（早川書房）で書いている。習慣化された思考パターンのことを「ファストシンキング（システム1）」といい、問題解決の思考パターンを「スローシンキング（システム2）」という。まさに **E** である。

テニスプレイヤーの錦織圭さんがあそこまで強くなった理由のひとつは、マイケル・チャン氏がコーチに付いて、反復練習を徹底的にやったことが大きい。ボールを見た瞬間に身体が動く。脳に負担をかけず、条件反射で身体が動くようになったからだ。

私たちは無意識のうちに、うまくなるうと思ったり、素早く行動しようと思ったり、何度も反復練習をする。脳の活動をスローシンキングからファストシンキングに **C** イコウしようとするわけだ。

こんなケースは誰でも経験したことがあるのではないか。

ある場所に初めて行くとき、あらかじめどの駅で降りればいいのか、どの出口から出ればいいのか、どの方面に歩いていけばいいか調べる。当日も、用意した地図を見ながら「ここでもいいのかな」「あっちかな」とキョロキョロしながら目的地にたどり着く。

しかし、二度目からは一直線に、無駄なことをしなくても到達できる。地図も **D** カンバンも見ることなく、必要最低限のエネルギーで動いている。通勤で、半分寝ぼけていてもいつの間にかオフィスの自分の机に座っていることがあるだろう。これはまさに、習慣化のなせる業である。 **⑤** 人間は、生理的な能力の限界によって、こうした思考のパターンを身につけている。

人間の脳は、ほとんどのことはこうした無意識化されたものなかで判断しているので、ついつい思慮が浅くなり、物事を必ずしも正しく理解できてはいない。ましてや環境が大きく変わっていく状況では、こうした無意識がさらにマイナスに働いてしまう。

多様性とは、まさに「無意識的な常識」の違う人たちがぶつかり合うことである。当然、うまくいかない。裏側にある前提条件がそれぞれ違うからだ。多様性を積極的に取り入れるということは、きわめて不快な思いを積極的に受け入れることによって、自分の

想定、常識、期待をことごとく裏切られるということである。

話を通じない。何を考えているのかわからない。イライラする。多様性を取り入れることのマイナス面ばかり見てしまうと、ほとんどメリットは享受できない。知っている人間同士でやったほうが話は早いし、コミュニケーションコストがかからないと考えてしまいがちだ。だが、最も重要なのは、あなたが気づかないうちに、^⑥こんなことが前提条件として刷り込まれているということを実感することなのだ。

うまくいかないときに相手を責める。自分の常識が正しいという前提で相手を叱責するのだが、ちょっと待てよ、と立ち止まって考えられるのが多様性のメリットだ。

「自分の考えは、こういう前提条件でしか成り立たないのではないか」

「状況によって、使い分けなければならないのではないか」

互いの意見の違いがあつたとすると、どのレベルで違つていたのかということを見出さなにかぎり前に進めない。逆に、それができるよになると、^⑦コウイキな分業をより有効にできるようになる。

多様性と言えは多くの場合、どちらかというときれいごとでしか認識されていない。

「1+1=3になる」

「食卓にはいろんな国の料理が並んだほうがいい」

こうしたレベルで止まっている。^⑦本来であれば受け入れるべき「調和を乱す」「常識を破られる」「期待を裏切られる」という、一見するときわめて不快な、心理的なコストの高いことのなかに、重要な価値が潜んでいることが認識されていない。

グローバル化するということは、グローバルに広がる多種多様な果実を楽しく採りに行くことではない。そのために英語が話せたらいいねという話ではなく、むしろこうした不調和に期待を裏切られるということのなかに積極的な価値を見出し、自らを振り返れるようになることが本質的な価値だと思う。

【問1】 ㉠㉡㉢のカタカナを漢字に改めなさい（楷書かいしょでていねいに書くこと）。

- ㉠ ミッセツ ㉡ マト ㉢ イコウ ㉣ カンバン ㉤ コウイキ

【問2】 ㉠「多様性」とありますが、これに関する次の説明文の a ～ d に当てはまる語を後の（ア）～（コ）

からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は2度用いてはならないこととします。

「多様性」とは、「多くの a によって構成されていること。方式や b が多くあるさま」などと説明されます。

では、みなさんは、小学校の教室で、まさに a の違うクラスメイトと机を並べている生活の中で、「多様性」を意識したり、感じたりすることはあるでしょうか。

たとえば、学級会でたくさんのお見解が出て、議論がまとまらなかった。家庭科の時間に、「我が家のお雑煮ぞうじ」を発表したら、具材や味に、実に多くの b があることが分かった。そうした出来事には事欠かないはずだ。

「多様性」はまた、「性質・性格の違うものが幅広く存在するさま。 c 点てんなどとも説明されます。みなさんも、誰かと考え方や感じ方に c がある場面に何度となく出会ってきたことでしょうか。

友だちと同じでありたい。友だちも自分と同じはず。けれども、実際には、友だちのA君ともBさんとも、多くが異なってしまう。ズレてゆく。そんな経験は誰にもあるでしょう。

そうしたときに、私たちはしばしば、そのズレが嫌いやになったり、そのズレから目をそらしたりしてしまいがちです。A君やBさんとの c がどのレベルで生じていたのかとか、ズレが発生するに至った d は何であったのか

といったところまで知ろうとすることは、なかなかないでしょう。

実は、ズレの **d** を知るためには、A君のこともBさんのことも知らなければなりません。また、意外に思っても知れませんが、A君のことやBさんのことを知ることが、自分を知ることにもなるのです。

こうしてみると、多様性を経験するということは、多くの **b** の事物やさまざま **c** が存在する物事に、単に触れたり出会ったりすることではなく、そこから何かに気づいたり、新しい何かを生み出したりすることなのです。

- | | | | | |
|---------------------------|--------|--------|--------|----------------------------|
| (ア) 共通 | (イ) 区別 | (ウ) 原因 | (エ) 個性 | (オ) 種類 |
| (カ) 相違 <small>さうい</small> | (キ) 特質 | (ク) 見方 | (ケ) 要素 | (コ) 確執 <small>かくじつ</small> |

【問3】

A・**B**・**C** に当てはまる語の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)〜(エ)

の記号で答えなさい。

- | | | |
|-------------|---------|---------|
| (ア) A Ⅱもちろん | B Ⅱしかし | C Ⅱまた |
| (イ) A Ⅱたとえば | B Ⅱさらに | C Ⅱだから |
| (ウ) A Ⅱすると | B Ⅱあるいは | C Ⅱしかし |
| (エ) A Ⅱだから | B Ⅱすると | C Ⅱもちろん |

【問4】

——②「一堂に□□」、——③「徒党を□□」とありますが、それぞれが慣用句になるように、□□に

当てはまる語を後の(ア)～(ク)から選び、記号で答えなさい。また、それぞれの意味として適当なものを後の(ケ)～(シ)から選び、記号で答えなさい。

《語》

- | | | | |
|---------|---------|---------|------------------------|
| (ア) 破る | (イ) 乱す | (ウ) 守る | (エ) 組む |
| (オ) 収まる | (カ) 会する | (キ) 加わる | (ク) 脱 ^{だっ} する |

《意味》

- | |
|---|
| (ケ) あることをなす目的で、仲間が一つにまとまること。 |
| (コ) あるグループや集団から、勇気をもって抜 ^ぬ け出す ^だ こと。 |
| (サ) ある目的をもって、多くの人が一つの場所に集まること。 |
| (シ) あるグループや集団に属すメンバーの、全員がそろ ^ろ うこと。 |

【問5】

□□ D □□ に当てはまる文章としてもつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) まず、三人以上を用意しておく。その上で、サクラは答えがA・B・Cすべてに分かれるように言う。
- (イ) そのサクラは、わざと考えこみ、なかなか答ええない。しばらくして、不安そうにAもしくはBと言う。
- (ウ) ふたりのサクラは、意気投合したようにふるまい、AかBと答える。しかも、わざと自信満々に言う。
- (エ) ひとりの被験者以外はすべてサクラで、全員が同じ答えを言う。しかも、間違った答えをわざと言う。

【問6】

④ 「それを意識化するという意味では、多様性を担保たんぽすることによって異なる常識とぶつかり合うことが大切だ」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選り、記号で答えなさい。

私たちは、ふだん、自分の常識と他人の常識とが異なっているなどとは、いちいち考えたりせずに行動しています。ましてや、自分の常識にバイアスがかかっているのではないか、すなわち、自分の常識にも

(ア) 極端きょくたんに視野のせまい所があるのではないか

(1) (イ) 公正さを欠いている部分があるのではないか

(ウ) 外国風の物の見方が混じっているのではないか

、などとは思ってもみないはずです。

けれども、筆者はそれを考えてみることに、思ってみることに必要性を説きます。もちろん、ほんとうの意味での多様性を知るために、です。

さて、ここで筆者のいう「多様性を担保する」とは、(2)

(エ) 一度、異なるものの存在を無視してみる

(オ) 異なるものの存在を、最優先にして扱あつかう

(カ) 異なるものの存在を許容して、保証する

ということです。

また、「ぶつかり合う」とは、単に、異なる常識を疑う、ということではありません。

(キ) いわば、他人の常識を疑うと同時に自分の常識をも疑う

(3) (ク) さらに、他人の常識が非常識であることを明らかにする

(ケ) むしろ、他人の常識の方が正しいのではないかと考える

、ということです。

私たちはそのようにして、誰もが、(4)の存在に近づいていける、と筆者は考えているのです。

- (コ) 世の中の常識の最大公約数的な姿を知る
 - (サ) 他人の常識の絶対的な公正さを認識する
 - (シ) 自分自身の常識を客観的にとらえなおす
- ことで、多様な価値

【問7】

E

には、「まったくうまいことを言ったものだ」という意味合いで、たとえ話などのうまい表現をほめるときに使う慣用句が入ります。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 言わぬが花
- (イ) 言い得て妙 みょう
- (ウ) 言わずもがな
- (エ) 言うはやすし

【問8】

——⑤「人間は、生理的な能力の限界によって、こうした思考のパターンを身につけている」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 人間は、脳でのエネルギー消費量が自ずとおさえられるようになっていたために、一度学習したことは、深く考えなくても処理することができる、ということ。
- (イ) 人間は、日常的に必要な最小限度の行動だけはとれるように、何らかの間違まちがいをしてしまった場合でも、それを補正しうる仕組みを脳が備えている、ということ。

(ウ) 人間は、脳の消費エネルギーが必要最低限で済むように、一つひとつの行為こういが必要かどうかを脳内で確認し、無駄むだを省くことを日々くり返している、ということ。

(エ) 人間は、身体のエネルギー消費の無駄をできるだけ少なくするために、一度目の誤りを、自動的に二度目以降の行動の合理的な判断材料にしている、ということ。

【問9】——⑥「こんなこと」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記

号で答えなさい。

(ア) 人間は、誰もが別々の境遇きょうぐうや社会的条件のもとで生まれ育ってきたにもかかわらず、その事実を日常生活のレベルで意識することを忘れがちである、ということ。

(イ) 人間は、習慣化したものには無意識でも対応できる能力を備えているが、初めての環境かんきょう下では、そのような能力がマイナスに作用してしまうことがある、ということ。

(ウ) 人間は、誰かを見ると、とかく自分と同じ常識を持っていると思いがちで、自分の基準で相手の行動を予期したり、あてにしたりしてしまうものである、ということ。

(エ) 人間は、生理的な能力の限界によって、人とのコミュニケーションも必要最低限のエネルギーで行おうとして、面倒めんどうなやりとりを自ずから避ける傾向けいこうがある、ということ。

【問10】

⑦「本来であれば受け入れるべき『調和を乱す』『常識を破られる』『期待を裏切られる』という、一見するときわめて不快な、心理的なコストの高いことのなかに、重要な価値が潜んでいることが認識されていない」とありますが、これに関する次の説明文の に当てはまる表現を後の (ア) (カ) からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

多様性は、こんにち一般には、単純に「よいもの」と捉えられる傾向があるようです。言語、文化、生活様式から生物や教育、あるいは職種、世代、国籍、人種など、さまざまな領域において、たくさんあるからそれがいい、違っているからそれでいい、というように、きわめて単調に、そして安易に扱われているのではないか、と思うことがしばしばです。

けれども、たとえば常識、価値観、判断基準、そのどれをとってみても誰もが持っていて、そればかりか、誰もがその持っている「自分のもの」を最優先にして、日々、行動しているはずなのです。そうした、いわば誰にも譲らない、場合によっては角突き合わせたようなありようを、「たくさんあるから」「違っていいから」といつて喜んでいられるでしょうか。

自分が譲りたくない、変えたくないと思つていいことは、人もまた、譲りたくないし変えたくもないと思つていいということです。筆者が説いているのは、そのことに気づくことの大切さであり、気づいたうえで を受け入れることの大切さです。

そもそもしたくないことを「受け入れる」のですから、気分がよいわけはありません。「不快」なのは当然でしょう。その上、それなりの覚悟を迫られることさえあるかもしれません。本来であれば関わりたくないような、面倒でやつかないことを丸ごと引き受けられるか、事によっては自らの全面的な見直しを迫られるような事態を受け入れられるか、

という覚悟です。

けれども、いえ、だからこそ、筆者は、そうした「覚悟」のような、bのなかに、重要な価値があることを指摘してきします。それは、言うなれば、私たちを広い視野のもとへと連れ出してくれるからなのです。すなわち、「自分のもの」ではない「他人のもの」に接すること、私たちは、たとえば自分の常識と想っていたものが実はある知恵ちえと知恵との交換こうかんによって育まれたものであったことに気づかされ、また、たとえば自分の価値観がcを痛感させられ、さらに、たとえば自分の判断基準がきわめて状況に依存いそんしていたことを思い知らされたりするのは、そして何よりも、そうした経験を一度すると、「自分のもの」と「他人のもの」とが違うことに対して、過度に神経質にならないで済すむようになります。そういう気づきあたを与えてくれることには、嫌悪けんおを覚えたり不快に思ったりするのではなく、むしろ、人を理解し、さらにはdがある、と分かるようになるのです。

多様性は、異なった、多くのものが、それぞれの自己主張をすることを容認するためのものではありません。誰もがあえて違いを楽しみ、不自由や期待はずれをも楽しみながら、自己主張とは少し違う次元たがでお互いを理解する、その可能性を押し開いてくれるものなのです。

- (ア) 実際に譲ったり変えたりすること
- (イ) 精神的に強しいられる負担の大きいこと
- (ウ) 自分自身をも理解するうえで大切なこと
- (エ) ある狭い領域せま内で通用するものでしかなかったこと
- (オ) こだわりとしての「自分のもの」をすべて捨ててしまうこと
- (カ) グローバル化した世の中のしくみを理解するうえで参考になること

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

母が、上京する。

電報を受け取ったその日から、佳代子はいそいそと支度にかかった。母と会うのは二年ぶりだ。それもこれまでは、盆や正月に佳代子が夫と連れだつて帰郷する折に会うばかりで、東京に呼んでも、日頃世話になっている弟夫婦に気兼ねしてか、母はなかなか重い **A** を上げようとしなかった。

「**①** ずいぶん楽しそうじゃないか」

部屋の隅々まで念入りに雑巾がけをする佳代子を、夫はからかってから顔をほころばせる。

佳代子にとって母はずっと、他の母親たちと比べるのも惜しいほど特別な存在だったのだ。

結婚前は初等学校の教員をしていたとかで、その辺りには珍しく教養があったのも、幼い佳代子には自慢だった。夜中、御不浄「トイ」に起きるたび、小さな電灯の下で籐椅子に腰掛け一心に小説を読む母の姿を見つけては、うっとりしたものだ。家事も一切、**B** を抜かなかつた。生来のきれいな好きのためだろう、いつでも家中淀みなく磨き上げられていたし、料理も必ず一工夫凝らしたものが食卓を飾った。家族の誕生日には小豆を煮だして赤飯を炊き、自ら型紙を起こしたハイカラなワンピースを佳代子のためにたくさん縫った。母自身も、質素だけれど趣味のいい服を身につけ、いつも身ぎれいでいた。普段は **C** の悪い級友たちも「おめえの母ちゃん、垢抜けとるなあ」と素直に褒めた。母特有の気品は、歳をとつても少しも衰えることがなかった。

上野の駅までは、夫に迎えに行つてもらつた。

佳代子はその間、井戸水でビールを冷やし、ちらし寿司の錦糸卵を慎重に作った。

D と、何度も表を窺つた。

車の音が家の前で止まり、木戸の開く音がする。佳代子は急いで玄関へと駆け出し、挨拶より先に安堵の息をついた。母は、なにごとつ変わっていなかった。品のいい鶯色の和服を身につけ、福々とした笑みを浮かべている。

「佳代ちゃん、しばらくお世話になりますね」

母の声がコロコロと鳴って、佳代子は顔を緩める。踊るような足取りで、新調した座布団へと母を導いた。

精一杯の御馳走を並べた夕飯の席で、母は饒舌だった。復員した誰それが高校の教員になったの、隣家の男の子が結婚したのと。

夫がビールを勧めると深々と会釈してからほんの少し口をつけた。佳代子の作ったちらし寿司をしつこいくらいに褒めた。

「なんだか夢のようだねえ。こうして佳代ちゃんの家で」

そう言って、^②目を細める。

「こんなあばら家で居心地が悪いでしょう」

夫が恐縮すると、^③母は大きすぎる仕草でかぶりを振った。

「東京で家を構えられるなんて立派ですよ。佳代ちゃんは果報者だ、感謝しないといけないよ」

「でもほんとはね、もつといい家があったのよ。茗荷谷でね、庭があつて、柘榴が植わつて。私はそこに移りたかつただけど、

この人が……」

佳代子は夫へ恨みがましい^④目をやる。

「いや、だって、あそこはなんだかげんが悪いようだったろう」

夫は仏頂面になり、それを笑顔に作り替えてから母に向いた。

「なんでも、その家に前に住んでいた男がご近所の若奥さんと駆け落ちしたらいいんですよ。それで僕はどうも気乗りがしません

でね」

母はビールのつがれたコップを両手で包み込んだまま、^⑤目を丸めた。

「その出奔した若奥さんの旦那さんが、まだご近所にいるっていうから、やはり気まずいんじゃないかと思ひまして」

「あら。でもその方だつてすぐに若くてきれいな後妻さんをおもらいになったんでしょ。そんなに気にすることもなかったんじゃない

ないかしら」

二人が言い合うのをしばらく目で追っていた母は、長い溜息をついて、

「東京らしい出来事だねえ」

と、E した声で言った。若い夫婦は顔を見合わせてから、大きく笑った。

銀座、浅草、日本橋。明日から母を案内する。母が居る間、佳代子は仕事も休みをもらい、車を雇えばいい、という夫の言葉に甘え、少し贅沢な東京観光を計画していた。暮らし向きは楽ではないけれど、ふたりにはまだ子もおらず、共稼ぎでもあったから少々たくわの蓄えはあるのだ。

「職業婦人だなんて」と夫の両親は眉をひそめ、子供ができないことと結びつけてF 佳代子を責めたが、母のような女性になりたくてタイピストという仕事を選んだ彼女は、微塵の負い目も感じなかった。

「明日、街へ出たら映画もいいでしょう。確か雷蔵雷蔵の市川の新しいのが封切られましたから」

夫が言うのに応えようとした母の口から突然、蛙の鳴くような音が漏れた。佳代子も夫も何事が起こったのかと母の口元を凝視した。それが大きなゲップであることに、すぐには考えが行き着かなかったのだ。夫は場を取りなすように「ビールのせいでしょう。僕もよくやります」と穏やかに笑った。佳代子はなにも言えず、ただ内心の動揺を隠すのに必死だった。こんな行儀の悪いことをする人ではなかった。咀嚼の音さえも厳しく注意する人なのだ。けれど、その音にもっとも驚いていたのは母自身には違いなかった。母は愕然とした様子で口を押さえ、それから黙ってうつぶむいた。さつきは気付かなかったが、母の髪は薄く、つむじの辺りは大きく地肌が見えていた。

翌日銀座へ向かう車の中で、母は落ち着かなく身を揺らし「こんな無駄遣いはいけないよ」と拝むような口調で言った。並木通りで車を降り、和光や松坂屋を眺める。中に入ってみましょうと佳代子が誘っても、なにも買わないんだから入ったら申し訳ないよ、と小声で返して沿道から建物を見上げるのだ。

そういうときの母の身体は、妙な具合に曲がっていた。腰が曲がっているというのではなく、そう、ちょうど子供をおぶったときのような、背中の重く傾いだ形によく似ていた。母の背はもうピンと張ってはいない。そこにはもう、なにかが貼り付いてしまっている。長い歳月がもたらす、逃れられないなにかが。

お昼は資生堂パーラーでとった。母はメニューを見て「G」と念仏のように呟いた。

「H」

佳代子がそう言う和不承不承、「I」と顔に不安を浮かべたまま言った。節々が鉤状に曲がった指でコップを掴んで、一口水を含み、「J」と微笑んだ。

「K」

「平気だよ。お母さん、足は丈夫だよ」

母はテーブルの下からひよいと下駄をのぞかせた。鼻緒は美しかったが、よく見ると齒のちびた下駄だった。

「歩きやすいんだから。鼻緒をすげ替えてもう十五年も履いてるんだ」

佳代子は、周囲のテーブルに母の声が届いてしまうことを恐れた。そういう心持ちになったのは初めてのことだった。

「そうだお母さん、帰りに新しい履き物を買きましょうよ。銀座だったら質のいいものをたくさん置いているはずだから」

母はとんでもないと首を振り、「新しいのを買ったって、生きているうちに履ききれないもの」と、そう言った。なんの感傷もない、あまりに自然な物言いだった。だから無駄になっちゃうよ、と母は言ったのだ。

佳代子はこういう高級レストランに出入りする婦人たちを、常々疎ましく思っていた。つまましい暮らしこそが理想だった。けれど今日ばかりは彼女たちの華美な装いや振る舞いが羨ましかった。こんな風に奔放で浪費家の母だったら、どれほど気が楽だったろう、と。

母は、人混みというものに至って無頓着だった。そんなものがこの世にあるということなど、まるで知らないようだった。

翌日行った浅草でも、ふたりはうまく人の流れに乗ることができず、仲見世や浅草寺の人混みに、波間に浮かぶ木の葉のようにもてあそばされた。母は気になるものがあると周りも見ずに立ち止まり「あれ、ごらん」と幼げな声で佳代子に話しかける。そのたびに人波が遮断され、過ぎゆく人々が迷惑顔を容赦なくこちらに向けた。佳代子が母を守るように手を添えても、みな平気でぶつかっていく。腹の中に言いしれぬ怒りが湧いて治まらなかった。東京という街の雑な味気なさを憎らしく思った。⑥

きつとこの街は、あつ
けらかんとすべてを暴いてしまふのだ。

慣れないことで佳代子もすっかり人酔いし、足も疲れたから甘味処に寄りましょうと誘ってみると、母はやはり「六十円もするもの」と首を振った。佳代子は、自分の厚意がいちいち値踏みされるようで虚しかった。母はそんな佳代子に構わず、楽しげに昔話をした。幼い頃の佳代子の話を。⑦

ちびた下駄の音がからからと空疎だった。

「佳代ちゃん、悪いけど、今日はご飯を多めに炊いてくれないかい」

母が言ったのは、上野見物に行く日の朝だ。佳代子はその通りにし、母の朝食を食卓に並べ、仕事に向かう夫を送り出した。母が使っている部屋に入ると既に布団は上げてあり、塵ひとつなく隅々まで掃き清められていた。変わらぬ母の証があった。けれど母が母なのは、故郷とこの家の中だけなのだ。

母はこの日、見慣れぬ風呂敷包みを持って表に出た。

「私を持ちましよう」

玄関口で佳代子が手を伸ばすと、慌てて風呂敷をかき寄せ胸に抱いた。その拍子に母の爪が触れ、佳代子の手の甲にひっかき傷を作った。上野まで歩く途中、その傷はみみず腫れになった。

母は昔、佳代子を叱るとき決まって平手で腿を撲った。華奢なくせに力が強く、その跡はいつもみみず腫れになった。佳代子は夜寝るときや学校の帰り道、

F

そこを触ってみた。不思議と悲しい気持ちにはならなかった。むしろ、なだらかに盛り上がっ

た丘陵は指に心地よいものだった。母の、てのひらの跡。自分の身体に刻まれた、母の強さだった。

不忍池を歩きながら「大きな蓮だねえ」とはしゃぐ母が、軽く足を引きずっているのに佳代子は気付く。

「足、お辛いんじゃないの？」

⑧ 母は急いで素知らぬ顔を作った。

なぜ甘えてくれないのだろう。佳代子は、得体の知れない苛立ちに覆われた。車だつて喫茶店で休むのだつていくらもしないことなのに。ただ、お母さんに喜んで欲しいだけなのに。

「やっぱり下駄を買いましょう。車で行けばいいわ。お昼は精養軒を予約してあるからそのあとで」

努めて明るく言うと、母はやにわに今朝の風呂敷を佳代子の顔の前に差し出し、得意顔で包みを解いた。そこには塩むすびが四つと、いつの間にか買ったのか、日水のソーセイジが二本入っていた。

「お母さんのために、そんなにお金を使うことはないよ、佳代ちゃん。食べるものなんてなんでもいいんだから」
佳代子は、母のてのひらを見つめたまま、ぼんやり立ちつくした。

そのとき、ちようど後ろを通りかかった若い二人連れが、道を塞いでいた母の背にぶつかった。その拍子にソーセイジがぼろりと風呂敷の中から転げ落ちた。

佳代子の中になにかが爆ぜた。

「道の真ん中で立ち止まっちゃ迷惑じゃない！」

あまりの剣幕に、母より若者たちのほうが驚いてこちらを見た。

「そんなちびた下駄を履いてちゃダメじゃない！ こんなどころでおにぎりなんか、みつともないんだわ」

佳代子は大声で泣き出したかった。どうして泣きたいのか、怒りなのか哀しみなのか、なにもわからなかった。わからなくなつて佳代子は駄々をこねたのだ。

こうして痲癩かんじやくを起こすと、母は必ず佳代子かよこを叱しかつたものだった。凄まじい厳しさで。凜りんと美しい仕草しくさで。けれど目の前の母は所在しぜんなげに風呂敷ふろしきを丸めて、小さくうつむいている。「ごめんよ。悪いことしたね」と心細こまげに詫わびている。

「お母さん、田舎者いなかもので……佳代ちゃんに恥はずかしい思いをさせちゃって」

「どうして周りが見えないの？ どうしてお金のことばかり言うの？ どうしてちゃんとできないの？」

母を責める言葉が、止まらなかつた。この残酷ざんくな気持ちはどこから来るのだろう。なにが許せないのだろう。きっと母でも、東京でもない。もつと大きな、自分がいつしか背負うってしまった現実げんじつが恨うらめしいのだ。それを受け入れたくなくてぐずっているのだ。

母は目に、うつすら涙なみだを浮かべて立ちすくんでいた。それから小声で「お母さん、もう佳代ちゃんの家うちに帰りたいよお」と言った。

⑨ 道の真ん中で、幼女おんながふたり、哭ないていた。

その夜、佳代子は慎重しんちょうに母に詫わびた。

母はけれど、なにもなかつたかのように優しく居やて、その後数日を過やごした。佳代子は母の上京を台無しにしてしまったことを悔くいた。この後悔こうかいから一生逃のがれられないだろうと思った。もう、それを取り戻もどす機会きかいは残のこされていない予感よかんがあった。

母が帰る日、夫いっしょと一緒に上野駅じょうのえきまで送おくつた。母は夫に何度も頭あたまを下くだげた。

「お世話になりました。安心あんしんしました。佳代子をよろしくお願いします」。それから佳代子に向むかって、「お陰様かげさまでほんとに楽しかったよ。いい思い出ができたよ」と何度も何度も礼れいを言った。

汽車くるまが滑すべり出だすと、母は開ひらけた窓まどからちよこんと顔かほを出だし、遠とほざかりながらやはり何度も頭あたまを下くだげた。白いほつれ髪かみがふらふらと風かぜにもあそばされていた。

母がすっかり見えなくなつてから、佳代子は手の甲こうに触ふれてみた。⑩ みみず腫はれはもうすっかり引ひいていて、桃色ももいろのかき傷きずだけが

うっすらと残っていた。

【問1】

A

B

C

に当てはまる語として適当なものを次の(ア)～(カ)からそれぞれ選び、記号で答えな

- (ア) 顔 (イ) 口 (ウ) 手 (エ) 腹 (オ) 腰 (カ) 足

【問2】

①「ずいぶん楽しそうじゃないか」とありますが、このときの佳代子の夫の様子としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 冗談めかしてほがらかに声をかけつつも、母親に対する妻の愛情のふかさにやきもちを焼いている。
(イ) 部屋がきれいになったことがうれしくて、熱心に掃除をつづける妻をそれとなくほめてあげている。
(ウ) 妻をいたわるような言葉をかけているようでいて、実は母ばかりを気づかう妻に皮肉を言っている。
(エ) ちゃかすようなことを言いながらも、母の上京を心待ちにする妻の姿をほえましげに眺めている。

【問3】

D

E

F

(ア)～(エ)の記号で答えなさい。
に当てはまる語の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の中から選び、

- (ア) D—うきうき E—しみじみ F—たびたび
(イ) D—そわそわ E—びくびく F—ぶつぶつ
(ウ) D—ちらちら E—きはきはき F—おどおど
(エ) D—こそこそ E—いじいじ F—ねちねち

【問4】

——②「目を細めた」、——④「目をやる」、——⑤「目を丸めた」とありますが、「目を細める」、「目をやる」、「目を丸くする」の意味として適当なものを次の(ア)～(カ)からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (ア) がまんする
- (イ) 視線を向ける
- (ウ) 驚いて目を見開く
- (エ) 笑顔になる
- (オ) 同意を求める
- (カ) 怖くて目を閉じる

【問5】

——③「母は大きすぎる仕草でかぶりを振った」とありますが、この様子からは母のどのような思いが読み取れますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 謙虚にふるまう佳代子の夫に対して、よりへりくだった身ぶりですること、儀礼的に謝意を示したい。
- (イ) 本当は居心地の悪さを感じていたのだが、佳代子の夫にそのことを悟られないよう、うまくごまかしたい。
- (ウ) 大げさな身振りによって、強く拒絶する意志をあらわすことで、高のぞみする佳代子の夫をたしなめたい。
- (エ) 佳代子の夫がすまなさそうにしているので、あえておどけてみせることによって、この場をなごませたい。

【問6】

G

K

に当てはまる表現として、適当なものを次の(ア)～(オ)からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (ア) じゃあ、佳代ちゃんと同じものをいただろうかね
- (イ) いいのよ、私も食べたいもの。たまの贅沢なもの
- (ウ) 無理よ。ここから千駄木まで歩くのは
- (エ) 帰りは歩きで行こうね
- (オ) 高いよ。高いねえ

【問7】

a

f

⑥「きつとこの街は、あつげらんかんとすべてを暴いてしまうのだ」とありますが、これに関する次の説明文の
に当てはまる語句を後の（ア）～（ク）からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

母が上京する日、佳代子は喜びと不安の入りまじった思いでその到着を待っている。母が変わってしまったのではない。佳代子の a はそれだった。そんな中、夫の車で家までやってきた母は、一見すると何も変わっていないかった。しかし、その日の夕食時、佳代子がかつての母からは想像もつかない、 b さらに、翌日、銀座を観光しているときの母の姿は、よく見ると若い頃の母のそれとは異なるものだった。何も変わっていないかのように見えた母にも、 c があらわれていたのである。それだけではない。母は人混みにうまく対処することもできなかった。母は佳代子が思い描いていたような「垢抜け」た存在ですらなかった、ということも、東京観光を通して明らかになってしまったのだ。一方で、東京での暮らしが長くなりつつあった佳代子も、かつての佳代子ではなくなっていた。たとえば、資生堂パーラーでは、佳代子は生まれて初めて母に対して d を抱いてしまっている。そればかりか、高級レストランに出入りする婦人たちと母を比較し、「こんな風に奔放で浪費家の母だったら、どれほど気が楽だったろう」とすら思ってしまう。これまで佳代子は e こそ美德だと考えていた。それはほかでもない、母から f であったはずだ。しかし、東京での暮らしを続けるうちに、佳代子もどこかしら東京に染まった部分もあつたのだ。東京の街はまさに何もなかったように平然と、そのような佳代子と母の現在の姿を浮かび上がらせてしまったのだ。

- （ア） 老いのきざし （イ） おちついた行動 （ウ） うとましい思い （エ） 憎たらしい態度
（オ） 質素な暮らし （カ） 受け継いだもの （キ） 気がかりのひとつ （ク） みつともない姿

【問8】

——⑦「ちびた下駄の音がからからと空疎だった」とありますが、この表現はこの場面のどのような様子をあらわしていると考えられますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 母に対する佳代子の怒りが収まっていない様子。
- (イ) お互いの心を通わせることができていない様子。
- (ウ) 東京観光を楽しむことができていない母の様子。
- (エ) 休憩を取ることなく歩き続けて疲れている様子。

【問9】

——⑧「母は急いで素知らぬ顔を作った」とありますが、このときの母の気持ちとして適当なものを次の中から2つ選び、

- (ア)～(オ)の記号で答えなさい。
- (ア) 自分のために東京を案内してくれているのだから、よけいな心配をさせてはいけない、という思い。
- (イ) せっかく楽しく過ごしているのに、こんなところで娘ともめぐとは起こしたくはない、という思い。
- (ウ) 本当は新しい履き物を買ってもらいたいが、そのことを素直に告げることができない、という思い。
- (エ) ただでさえ疲れているのに、足のことに関して何度も同じ話をくりかえしたくはない、という思い。
- (オ) ひさしぶりに親子水入らずで過ごしている、この場の楽しい雰囲気をごわしたくはない、という思い。

【問10】

⑨ 「道の真ん中で、幼女がふたり、哭ないていた」とありますが、これに関する次の説明文の

a

↓

d

に当てはまる表現を後の (ア) ～ (カ) からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

佳代子は怒いかりをぶちまけ、母を責め立てた。こんな時、かつての母であれば威厳いげんに満ちた態度ではずだ。ところが、母はまるで叱しかられている子どものように **b**。

もちろん、現実を受け入れられなかった佳代子にとって、母のそんな姿が望ましいものであったはずがない。結果的に、母のふるまいは佳代子の **c** にちがいない。それゆえ、佳代子は思い通りにならなくてぐずる子どものように、際限なく **d** のだろう。

癩癪かんしゃくを起こして泣き出しそうになる佳代子。責められてうっすら涙なみだを浮かべている母。そんな二人の姿は、まるで幼い子どもが泣いているようであったのだ。

(ア) 言動をとがめた

(イ) 冷静さを取り戻した

(ウ) 怒りを助長した

(エ) わめき散らした

(オ) 興奮を隠せなかった

(カ) 萎縮するばかりだった

【問11】

⑩「みみず腫れはもうすっかり引いていて、桃色のかき傷だけがうっすらと残っていた」とありますが、これに関する次の説明文の [a] ～ [f] に当てはまる語を後の (ア) ～ (ク) からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

この物語は八代目市川雷蔵が注目を集めていた頃、つまり、一九五〇年代後半から一九六〇年代の東京を舞台として
いる。この頃の日本と云えば、「もはや戦後ではない」〔経済白書 一九五六年〕という言葉が象徴的に示しているよ
うに、第二次世界大戦後の復興が一段落し、 [a] 的に豊かになっていく時代であった。たとえば、一九五四年に
八七〇〇円だった公務員の初任給は、一九六五年には三万一〇〇〇円となり、それと連動するように物価も上昇していっ
た。

こうした状況の中、東京へとやってきた母は、さぞ驚いたことだろう。佳代子が連れて行ってくれた資生堂パーラー
は、定食が六〇〇円から八〇〇円もするようなレストランだったのだ。もちろん、甘味処の六〇〇円ですら、母にとって
は身の丈に合わない贅沢であった。だからこそ、娘に無理をさせてはならないと思い、母は厚意を拒み続けたのである。
一方で、佳代子にとって、母はこれまでずっと [b] の女性であった。決して豊かとは言えない状況の中、小説
を読み、ハイカラなワンピースを縫ってくれた母。いつも身ぎれいで、同級生から「垢抜け」ている、 [c] され
ていると言われた上品な母のことを、佳代子はいっただって [d] のまなざしをもって見つめてきた。そんな母の待
ちに待った上京である。佳代子は多少無理をしても母をもてなし、心ゆくまで満喫してもらおうつもりだった。しかし、
現実には佳代子の思い通りにはならなかった。それどころか、二人で東京を観光することによって、 [e] の中の母
はもういない、ということに佳代子は気づかされることになってしまうのだ。

母を [b] の女性だと思えたのは、田舎町の中では母が [c] された存在として見えていたからにすぎない。
銀座、浅草、上野と母を連れ回したことによって、佳代子は母が特別な存在ではないという事実をまざまざと見せつけ

られてしまったのだ。そればかりか、年老いた母は、癩癩かんじくを起こす佳代子を、かつてのように凜りんと美しく、厳しい態度で叱よかることもなかった。時間の経過とともに、母との **f** も変わってしまったのだ。

かつての母の面影おもかげが見いだせず、佳代子は幼い頃の母、 **e** の中の母はもういない。そう悟さとったのではないだろうか。

- | | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|------------------------|
| (ア) | 希望 | (イ) | 理想 | (ウ) | 関係 | (エ) | 羨望 <small>せんぼう</small> |
| (オ) | 同情 | (カ) | 洗練 | (キ) | 経済 | (ク) | 記憶 <small>きおく</small> |

【出典】

I 山田英二『新しいグローバルビジネスの教科書』P H P新書（P H P研究所、二〇一五年）より。ただし、一部省略したところがある。

II 木内昇「てのひら」・『日本文学100年の名作 第10巻』（新潮文庫、二〇一五年）より。

